

リトレの辞典について、 再考察されるべき3つの問題

平尾 浩 一

エミール・リトレの『フランス語辞典』*Dictionnaire de la langue française* (1863-1873; 『補遺』1877, 以下, 単に『リトレ』の表記で置換える場合有)¹⁾は, その保守的性質, 古典主義文学(17,18世紀フランス文学)への偏重, そして民間語軽視の傾向を指摘されてきた。以下に挙げるのは, 今日における典型的な『リトレ』評価の一例である。

[...] Plus que par la richesse de sa nomenclature, qui, sans être mince, n'accueille pas un certain nombre de termes techniques et scientifiques de l'époque, ainsi que certains mots de la langue familière et certains néologismes (le supplément se montre à cet égard nettement moins puriste), le dictionnaire de Littré est (et reste) remarquable du fait de sa richesse en exemples littéraires, [...] en effet, dans leur très grande majorité, ces citations sont empruntées à des écrivains des XVII^e et XVIII^es²⁾.

また同時代の辞典編者ピエール・ラルースも, その競争相手の著作における語彙の偏狭ぶりを指摘している。

[...] et souvent entre deux mots qui se suivent, chez M. Littré pourraient s'en glisser une vingtaine d'autres [...] ³⁾.

時代に対応する形で技術用語, 新語, そして俗語をも能うる限り取り込もうとしたラルースにとって, 『リトレ』はあまりに「学者向け」であると感じられたようである。

この19世紀を代表する辞典は, 本当に保守的であるのか。リトレは新語, 技術語, 俗語を軽視したのだろうか。彼はフランス文学史上に既に不動の名を確立した文学者たちに, もっぱら規範を求めたという意味で「ピュリスト」だったのだろうか。本稿は『フランス語辞典』の他に, リトレが1862年に発表した『フランス語史』⁴⁾とその続編である1880年の『研究と覚書』の中の特に「言葉の病理」という小論⁵⁾によって, この辞典編者の, フランス語の時代的変遷に対する見解を明らかにしながら, リトレのフランス古典主義評価, 彼の言語の「規範」に対する姿勢, そし

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

てその「伝統」の観念の3点に関して、再考察を試みるものである。

1. フランス古典主義という「権威」に関して

リトレが彼の辞典のその豊富な引用例として含めるのは、最も新しいものでもせいぜい1830年頃の作品であり、引用は17,18世紀に偏り、ロマン主義台頭以降の同世代（19世紀中葉から後半にかけて）の作家たちはほとんど無視されていると言ってよい（1877年の『補遺』はやや異なる様相を見せているが）。ピエール・ラルースがその辞典にユゴー、バルザック、サンドラのテクストを豊富に盛り込んでいることと比較すると、いかにも保守的で懐古趣味であるように感じられる⁶⁾。

彼は既に古典的とされていた作家たちの名を引いてくることによって、様々な用法の権威付けとしたのであろうか。そういった一面も無いとは言いきれないだろう。しかし一方で、彼が現用の語法に批評を加えた、辞書の各項の中の「注記」*remarque*を注意深く読めば、引用例文に大家たちが名を連ねるような用法であっても、彼の批判を逃れていないものが少なくない。自らの批評家としての態度を明確にしながら、リトレは序文の中で«dans ce but» «imprimer un mouvement» «se suicider»などの表現を、論理的整合性を欠いた成句の例として列挙している。

実際の項目の記述を参照しても、たとえば«imprimer un mouvement」とは、いくらボシユエが『説教集』の中で、フォントネルが『世界多数論』の中で、そしてヴォルテールが『哲学辞典』においてその権威をもって使用していたとしても、論理的に破綻した言い回しだとリトレは裁きを下す。同じく«se faire moquer de soi」という表現についてもラ・ブリュイエールの『人さまざま』、モンテスキューの『ペルシア人の手紙』、ダランベールの『哲学、歴史、文学に関する雑纂』という申し分の無い保証があるにしても、それは言い回しの成り立ちを検討してみれば«faire moquer soi de soi」という無意味な内容しかもたない、悪しき成句として糾弾することを彼はためらわない。

実際、リトレの言語観とは保守主義あるいは権威主義から程遠い。それは『フランス語史』で、古フランス語再評価の論述の中に現れる以下の文章からも明らかである。

[...] Aujourd'hui encore, il n'est besoin que d'écouter parler sans prévention les personnes illettrées, surtout dans certaines provinces, pour reconnaître, dans les mots, dans les locutions, dans la prononciation, des particularités tout aussi légitimes et souvent bien plus élégantes, énergiques et commodes que dans l'idiome officiel⁷⁾.

この言語学者は、フランス文学古典主義時代の言語に関して幻想を抱いてはいないようである。「言葉の病理」の中では17世紀を「語義における新語法を生み出す傾向が強い⁸⁾」と分析しながら、一般には「純粹主義的な貞淑さ」をもって評されているこの時代の言語思想を「良くも悪くもそ

の評価には値しない⁹⁾」と、やや冷めたような評価を下しているのである。

ただしリトレは17世紀前半から中葉にかけての言語と、「固定化」と「純化」の風潮が強まった同世紀後半の言語との間には境界を設けている。

Au moment où se fixa définitivement la langue dont nous nous servons aujourd'hui, l'usage fut pris dans un sens très-étroit ; ce fut le beau monde, la cour, les coteries lettrées qui en décidèrent, et l'Académie, récemment instituée, l'enregistra avec tant d'arbitraire, qu'une foule de locutions excellentes, employées par Malherbe, par Corneille, par Molière, se sont trouvées mises en dehors et proscrites¹⁰⁾.

このように、我々はリトレの中に、「純化」の名の下に、そして権威を楯にして言葉から自由を剝奪しようとする、言語的イデオロギーに対する疑念を認めることができる。第一に彼は、言語を「固定」するという理念に不信を抱いているのである。

Les mots ne sont immuables ni dans leur orthographe, ni dans leur forme, ni dans leur sens, ni dans leur emploi. Ce ne sont pas des particules inaltérables, et la fixité n'en est qu'apparente. Une de leurs conditions est de changer ; celle-là ne peut être négligée par une lexicographie qui entend les embrasser toutes. Saisir les mots dans leur mouvement importe ; car un mouvement existe. La notion de fixité est fautive ; celle de passage, de mutation, de développement est réelle¹¹⁾.

こうしてこの辞典編者は、言語をダイナミズムのうちに捉える。言語を「洗練」という、そして野卑な語用を排除するという名目で、歴史的考察を欠いたまま、豊かな言葉の宝庫をやせ細った表向き「優雅な」システムに変貌させようとする「ピュリスム」を、彼は容認することができない。言語における「ピュリスム」という概念は、リトレにおいて否定的なニュアンスを帯びることが多い¹²⁾。後の世において、百科事典の中で自らに関してその形容がなされていることを知ったなら、彼は激しく反駁するに違いない。

2. リトレと言語の「規範」

言語の固定化を疑ってかかったリトレが、それに「規範」を設けようとしなかったことは当然である。実際に彼の辞典は純粹主義的どころか、さまざまな規範からの逸脱を含んでいる。我々はこの章にて、『リトレ』の中に見られる三つの「逸脱」について考察する。

第一の規範からの逸脱、それは地理的な探求の内になされる。すなわちリトレは、イル・ド・

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

フランスで使用され、その洗練、美において地方語を圧倒しているように自負している「標準」フランス語の質に疑問を呈している。そして不当な優越意識、根拠の無い方言への蔑視を打破しようとするのである。

Les patois, dans l'opinion vulgaire, sont en décri, et on les tient généralement pour du français qui s'est altéré dans la bouche du peuple des provinces. C'est une erreur. Je montrerai plus loin [...] que les patois sont les héritiers des dialectes qui ont occupé l'ancienne France avant la centralisation monarchique commencée au quatorzième siècle, et que dès lors le français qu'ils nous conservent est aussi authentique que celui qui nous est conservé par la langue littéraire¹³⁾.

著者がその序文の中で方言、俚言の正統性を証明するために例に挙げるのは、まず「木蔭」を表す標準語の« lierre »である。この語は古仏語の« hierre »が冠詞との膠着によって生じた、語源的見地からは非正統的な語である。他方で、元の正統な綴字はむしろペリーやノルマンディー等の地方語に残存しているのである。さらに彼は方言が語源学に貢献する例として、「轍」を意味する標準語の« ornière »の例を挙げている。「ornière」がラテン語の« orbita »から派生した語であることを確認しようとする語源学者たちは、派生の法則に従えば、フランス語においては« orbière »が生じるはずであるために、疑問に突き当たる。この« ornière »と« orbière »の間の隔たりを埋める要素を求めれば、ワロン語の中に« ornière »を意味する語« orbière »が発見されるのである。こうして語源から近代語への連続性が成立する。

リトレは1877年に出版した辞典の『補遺』において、その全語彙の中の地方語の割合を更に増している。言語学の研究のキャリアを積み重ねるに従って、彼はそれまで軽視されていた地方語、俚言のもつ重要性をさらに痛感するようになったのである¹⁴⁾。

地理的に探求の足を伸ばしていくと共に、リトレは時間的にも「規範」からそれていく。第二の「逸脱」である。

彼は一方で自らの辞典において「現代の慣用こそが主要な対象である」とし、廃れた古語については「それは他の仕事における対象であって、私の仕事とはまったく異質のものである」と明言しながらも、また一方では古びた語を完全に捨て去ってしまうことを躊躇している。

[...] mais, dans plus d'un cas, il est difficile de dire si tel mot doit définitivement être rayé de la langue vivante, et rangé parmi les termes vieilliss dont l'usage est entièrement abandonné et qu'on ne comprend même plus¹⁵⁾.

[...] c'est la possibilité qu'un terme vieilli effectivement n'en revienne pas moins à la jeunesse; on rencontrera plus d'un exemple de ce genre de résurrection dans le

dictionnaire ; plusieurs mots condamnés par l'usage ou par un purisme excessif sont rentrés en grâce [...] ¹⁶⁾.

そして埋もれた言葉の財宝を次々と掘り起こしていくと同時に、価値ある死語の復活を願うリトレの独自の観点、辞典編者としてやや主観的ともいえる態度は、以下の一節の中に顕著に表わされていると言えよう。

[...] Enfin la qualité même et la valeur du mot m'ont engagé plus d'une fois à le noter, soit qu'il n'ait plus d'équivalent dans la langue moderne, soit qu'il complète quelque série ; et je l'ai mis, non sans espérance que peut-être il trouvera emploi et faveur, et rentrera dans le trésor commun d'où il est à tort sorti ¹⁷⁾.

著者はそれらの廃語を評価し、さらに「現代語」の辞典の項目に記載する時、17世紀にピュリストたちによって排斥されそうになったものの、再び一般語の中に信用を勝ち得た語「sollicitude」の例を楯にとって、自らの態度を正当化するのである。

ここで、実際にリトレが先行の辞書の語彙にいかなる語を付け加えたかを、具体的に検討してみようと思う。モデルとしては、彼の『フランス語辞典』の冒頭100項目を採り上げる。そして比較対象として、彼が批判の対象とした1835年のアカデミー・フランセーズの第6版の辞書¹⁸⁾と、さらにリトレの辞典の出版が開始された1860年代において最も高い評価を得ていた辞書のひとつ、ルイ・ニコラ・ベシュレルの百科事典的な『フランス語国民辞典』¹⁹⁾を選ぶことにする。

以下の一覧表がこの比較対照の結果である。

a (s. m.).....	A	B	abat-vent.....	A	B
a (= avoir).....	A	B	abat-voix.....	A	B
à (prép.).....	A	B	abbatial, ale.....	A	B
à (prép.).....	A	B	abbatit*.....		
abaca*.....		B	abbaye.....	A	B
abaissant, ante.....		B	abbé.....	A	B
abaisse.....	A	B	abbesse.....	A	B
abaissé, ée (adj.).....	A	B	abc.....	A	B
abaissée (s. f.)*.....		B	abcd.....		
abaissement.....	A	B	abcédé, ée.....	A	B
abaisser.....	A	B	abcéder.....	A	B
abaisseur.....	A	B	abcès.....	A	B
abait.....		B	abcisse.....	A	B

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

abajoue.....	A	B	abdalas.....	A	B
abalourdi, ie.....		B	abdicataire*.....		
abalourdir.....		B	abdication.....	A	B
abandon.....	A	B	abdiqué, ée.....	A	B
abandonnataire.....		B	abdiquer.....	A	B
abandonné, ée.....	A	B	abdomen.....	A	B
abandonnement.....	A	B	abdominal, ale.....	A	B
abandonnement.....			abducteur.....	A	B
abandonner.....	A	B	abduction.....	A	B
abaque.....	A	B	abeausir (s').....		B
abas.....		B	abécédaire.....	A	B
abasourdi, ie.....	A	B	abecqué, ée.....	A	
abasourdir.....	A	B	abecquer.....	A	B
abat.....		B	abée.....	A	B
abatage.....	A	B	abeille.....	A	B
abatant.....			abeillé, ée*.....		
abâtardi, ie.....	A	B	abeiller*.....		
abâtardir.....	A	B	abeillère*.....		
abâtardissement.....	A	B	abélien*.....		B
abatée.....	A	B	abergeage*.....		B
abatellement.....		B	aberrant, ante*.....		B
abat-faim.....		B	aberration.....	A	B
abat-foin.....		B	abêti, ie.....	A	B
abatis.....	A	B	abêtir.....	A	B
abat-jour.....	A	B	abêtissement.....		
abat-sons.....			ab hoc et ab hâc.....	A	B
abattable.....			abhorrible*.....		
abattant*.....		B	abhorré, ée.....	A	B
abattement.....	A	B	abhorrer.....	A	B
abatteur.....	A	B	abigail*.....		B
abattis*.....		B	abigéat.....	A	B
abattoir.....	A	B	abigoti, ie.....		
abattre.....	A	B	abîmant, ante*.....		
abattu (s. m.)*.....			abîme.....	A	B
abattu, ue (part. passé)..	A	B	abîmé, ée.....	A	B
abattue (s. f.).....		B	abîmer.....	A	B

abatture..... A B ab intestat..... A B

(補足)

単語の右肩にある*印は、リトレが1877年の『補遺』にて自らの辞典に付け加えた語であることを示している。また各単語の右横に記された«A»はアカデミー・フランセーズの辞典の第6版の語彙に、「B»はベシュレルの辞典の語彙に含まれていることを表している²⁰⁾。

『リトレ』はアカデミーの辞典の語彙をすべて網羅していることを謳っているが、この比較からはさらに専門、技術用語 (« abait » « abandonnataire » « abattement » 等)、俗語 (« abalourdir » « abigail » 等) がその語彙に付け加えられていることがわかる。

しかし留意すべきは、豊富な語彙を誇るベシュレルの辞典においてさえ省かれていながら、リトレが採用した幾つかの語であろう。例えば « abandonnement » は「18世紀においては[.....]なお使用されていた語で、用いられるべき語」と評価しているし、「abeiller」は「オリヴィエ氏によってフランス語に加えられた俚言」であり「美しい語である」と賞賛している。また廃れた « abigoti, ie » については「慣用の中に戻すべき」ことを主張している²¹⁾。これらの比較はリトレの探求が地理的、時間的に規範を外れて、フランス語の潜在性を探ろうとさまよい出ていく様を明らかにしている。

最後に第三の逸脱、それは文体論的性質を持つものと言える。

我々は辞典編纂における引用例の挿入に関する、ジョルジュ・マトレの次の批判について考察する必要がある。

Les textes en vers, surtout ceux qui expriment une expérience originale, se situent à l'opposé des textes de prose qui utilisent un vocabulaire socialisé, dont l'étude est l'objet essentiel d'un dictionnaire. Les oeuvres poétiques ont quelque chose d'aberrant par rapport à la norme du langage, et, on pourrait dire, d'un point de vue strictement lexicographique, qu'elles nous offrent un exemple de pathologie du vocabulaire²²⁾.

ここにおいて批判されているのは、言ってみれば「言語」と「文体」の混同である。しかしマトレが「語彙の病理」と呼ぶ詩的文体にまで、リトレの語彙記述は踏み込んでいる²³⁾。そして意識的であるにしろ無いにしろ、著者はこの種の引用例の挿入を正当化しているようでもある。というのは、彼が序文の中で文学等の用例を挿む意義について言及する時に引き合いに出すのは、ラマルティエヌの『詩的諧調』の中の詩句であり、そこで用いられている、「sans date」という表現のアカデミーには認可されていない用法なのである。

[...] Mais ouvrez les *Harmonies* de M. de Lamartine, et vous rencontrerez :

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

Ce furent ces forêts, ces ténèbres, cette onde
Et ces arbres *sans date* et ces rocs immortels...

et dès lors vous inscrivez à sa place *sans date* avec le sens d'*immémorial*, du moins dans la poésie²⁴⁾.

「少なくとも詩においては」。この一句が、彼の語彙記述が決して詩的文体を排除するものではないことを明らかにしている²⁵⁾。そしてこの語彙探究者は「言語」の領域を超えて「文体」へと積極的に記述を進めていく。リトレが著名な作家を引く主要な動機は、語法を権威づけることでも、辞書に興を添えることでもない。そこでは引用例は定義を「補足」するものとは捉えられていない。著者は、しばしば定義に取って代わり得る引用文の有効性を説いている。さらにリトレは引用例こそが、辞書の中で第一義的価値を持つとみなしてさえいるようだ。

[...] les exemples offrent des combinaisons que les dictionnaires n'ont pas²⁶⁾.

リトレ以前のベシュレルやラ・シャトルにおいても²⁷⁾、確かに文学からの引用は量的に決して貧弱なものではない。しかし、実際のテキストをひもといて語彙を研究することの価値を先人たちよりもはるかに声高に主張しながら、リトレは明らかにジョルジュ・マトレの呼ぶところの「常軌を逸した」領域にまで達している。

L'emploi divers et vivant par un auteur qui à la fois pense et écrit, donne lieu à des acceptions et à des nuances qui échappent quand on forme des exemples pour les cadres tout faits²⁸⁾.

そして「定義」*définition*の中にさえ、一作家の文体への言及が現われることになる。名詞« itinéraire »はシャトブリアンによって『パリからエルサレムへの旅』の中で「旅行者が訪れた土地を描いた地誌」の意で使われたのであり²⁹⁾、その同じ作家は« l'homme des anciens jours »という表現によって「老人」を意味して「批判された」のである³⁰⁾。

最後に、次の箇所はリトレの辞典における「文体」の追求を、顕著に表している。

L'intercalation des exemples est une épreuve dont la classification des sens sort presque toujours modifiée, corrigée, élargie. Il n'en faut laisser aucun hors cadre ; aussi m'efforcé-je toujours de leur trouver un compartiment convenable à la nature du mot et à l'intention de l'auteur³¹⁾.

結果的に彼は言語の辞典のみならず、文体の辞典まで編んでしまったのではないかと思わせる一節である。

3. リトレと「伝統」

リトレと伝統、それはさまざまな誤解を生んできた争点であろう。リトレが17世紀のフランス古典主義時代を模範として仰がなかったことはすでに述べた。それどころか、フランス語が17世紀以降、ひとつの高みに達したとする優越意識を切り捨て、近代フランス語と古フランス語の間の差異を「進歩」とみなす見解を糾弾する。

[...] C'était là l'illusion des gens du dix-septième siècle et du dix-huitième ; pour Voltaire, ces dissemblances [= les dissemblances entre l'usage ancien et l'usage moderne] ne sont qu'une rouille de barbarie qui s'est effacée par le progrès des lumières, et il est plein de mépris pour le jargon qui se parlait au temps de Saint Louis. Mais il n'y a aucun compte à tenir, en ce cas, de son jugement et de tout jugement pareil, car ce jugement était porté en pleine ignorance des faits [...] ³²⁾.

そして今ひとつ、彼の激しい攻撃の対象とされるのはルネサンス期における言語の変革の試みである。『フランス語史』の中の古仏語擁護の文脈において、リトレはフランスの歴史において既存言語に対する2度の「反乱」を認めているが、16世紀の運動もそのひとつである。

[...] le premier [= le premier exemple d'insurrection] appartient au seizième siècle, quand une folle imitation des Grecs et des Latins s'empara des esprits ; le succès de la tentative ne fut pas heureux ³³⁾.

ルネサンス期の言語に関するイデオロギーが犯した過ちを許容できない著者は、たとえば「古代語マニアたち」が自国語の名詞の性を安易に変えたと批判している。すなわち古フランス語においてはラテン語の語尾に「-or」を持つ抽象名詞を導入する際、全ての語を「女性」に統一したのだが（「la douleur」「la peur」「la chaleur」等）、古代の模倣に熱中した16世紀の文学者たちはそれらがラテン語において「男性」であった事実とのずれを不快に感じて、フランス語の方を古代言語に一致させようと試みたのである。そしてその結果は、これらの名詞の性の混乱を招いただけだったという³⁴⁾。

いったいリトレはルイ14世の時代、そしてルネサンス期を飛び越えて中世にフランス語のユートピアを見い出したのだろうか。しかし上述したように変動のうちに言語を捉える彼の価値観を、そのように単純に結論づけることはできないだろう。以下に挙げる辞典の序文と『フランス語史』

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

の「語源に関する一般的考察」の中の文章からも、やはり彼は一つの時代のシステムに理想を求めてはいないと思われる。

En effet un mot que rien dans sa création primitive, d'ailleurs inconnue, ne permet de considérer comme quelque chose de fortuit, l'est encore moins dans des langues de formation secondaire telles que les langues romanes et, en particulier, le français [...] ³⁵⁾.

[...] et le fait est que la faculté qui transforme est de même nature que la faculté qui créa ; les transformations étant, dans tous les cas, une création pour une part ³⁶⁾.

したがって、時代を遡るほど理想的言語の状態に近づくという観念はリトレの中には認めづらい。この言語学者が17世紀から18世紀にかけてのフランス語を、あるいは16世紀の言語改革の試みを非難した動機には、むしろあるひとつの言語体系を盲目的に賞賛する思想を戒めようとしたこと、そしてそれらの思想によって蔑まれてきた言語体系を再評価、擁護しながら「相対化」を試みたことがあったように思われるのである。

ただし、一方でリトレが明らかに「伝統」に重きを置く側面を見せていることも確かである。彼は伝統をして「概して敬うべき」ものであるとしている ³⁷⁾。それは複雑化する以前の統一的な体系、そして類推による理解可能性を古い時代の言語の中に見出すからであろう。たとえば「言葉の病理」では« devis » « devise » « deviser » の3語が同語源に由来し、古フランス語ではその形跡をとどめながらも、近代語にて互いをつなぐ類推の鎖が断ち切られてしまったことに言及している。

[...] En effaçant la trace de cette identité ici et ailleurs, l'usage ôte à la langue la faculté de voir dans le mot plus qu'il ne contient, pris isolément en soi. Un des charmes des langues anciennes est que la plupart des mots se laissent pénétrer par le regard de la pensée à une grande profondeur ³⁸⁾.

この語と語、そして語義と語義の間の類推可能性こそ、リトレが言語の価値判断において重んじる点である。

そしてダイナミズムのうちに言語を捉えるリトレが正当として認めるのは、論理の連鎖を伴った変化のみである。その辞典の序文においても語の歴史的変遷について述べる時、彼が« série » « enchaînement » といった概念を重視しているのが認められる。

[...] Cela étant, un dictionnaire comme celui-ci, ne pouvait pas les [= les patois] négliger ; car ils complètent des séries, des formes, des significations ³⁹⁾.

[...] Ces considérations montrent qu'établir la filiation des sens est une opération difficile, mais nécessaire pour la connaissance du mot, pour l'enchaînement de son histoire, surtout pour la logique générale qui, ennemie des incohérences, est déconcertée par les brusques sauts des acceptions et par leurs caprices inexplicables⁴⁰.

その語彙記述においても、そして歴史言語学の研究においても、リトレは、古い語から新たな語が造られ、また古い語義から新たな語義が派生していく連鎖を丹念にたどっていく。それは各時代の民衆の、そして作家たちの創造性に満ちた精神を通時的に追っていく悦びを伴った作業である。

一方で彼は、論理の飛躍や偶然によって生じる変化に対して厳しく批判を加える。それは創造的精神の連鎖を断ち切る「蛮行」であるからだ。リトレが伝統を敬うのは、そのためである。脈々と存在する通時的な論理の連続性を第一義的とする、彼の言語観が生む、当然の帰結だろう。

結 論

『リトレ』は今日なおフランスの代表的な辞書に多大な影響を及ぼしている。ポール・ロベールは彼の辞書を企画した際、自らの両親や祖父母たちの世代におけるリトレ辞典のような存在が欠如していると感じたのであり⁴¹、またポール・インプスは『フランス語宝典』がリトレの記念碑的著作の再版あるいは改訂についてのディスカッションから生まれたものであることを明らかにしている⁴²。

それとは別にまた、彼の辞典はマラルメ、ゾラ、ポンジュをはじめ、少なからぬ作家たちに靈感を吹き込んできたのである。アンリ・メシヨニックはマラルメの『英語の単語』の中の一節に触れた後で、次のように述べている。

[...] C'est que Mallarmé le (= le dictionnaire de Littré) lit poétiquement, et le problème poétique n'est pas celui du passé, mais celui de l'avenir du sens⁴³.

この『リトレ』の内に潜むポエジーを、アラン・レイはさらに直接的に表現している。

Œuvre d'Arlequin, dépouille et trophée, le *Littré* est un grand poème brisé où les paroles disjointes des classiques, enchâssées dans la froide objectivité du code métalinguistique, donnent à l'apparence d'une science la vérité d'un mythe⁴⁴.

アラン・レイはこの辞書の中に、汲めども尽きせぬ詩の源泉を見てとっている。

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

しかしフランス辞書学にて重大な位置を占めるリトレが、英米系の辞書学においては、例えば同時代のドイツのグリム兄弟に比べても、軽んじられているとは言えないだろうか。我々が今日の世界の言語においてフランス語が占める位置、その独自の言語思想に着目する時、またフランス語の「精髓」なるものを再考察しようとする時、19世紀における記念碑的著作『フランス語辞典』の含有する価値の更なる探究は、意義深いことだろう。

保守的、古典主義、権威主義等の形容を付されがちなその辞典は、実は自由奔放な精神を持ち合わせ、またその著者は不当に忘却の中へ、そして地方へと追いやられた美しい言葉の財宝を飽くなき探求心でもって掘り出し、そして擁護するヒューマニストでもある。

注

- 1) Émile LITTRÉ, *Dictionnaire de la langue française*, 4 vol. et 1 supplément [1863-1877], Hachette, 1876-1878. (以下 *DLF* と省略)
- 2) *Dictionnaire encyclopédique Larousse*, Larousse, 1982.
- 3) Pierre LAROUSSE, *Grand Dictionnaire universel du XIXème siècle*, 15 vol., Paris, 1866-1876; suppléments, 1878 et 1888.
- 4) Émile LITTRÉ, *Histoire de la langue française : études sur les origines, l'étymologie, la grammaire, les dialectes, la versification, et les lettres au moyen âge*, 2 vol., Didier, 1862.
- 5) Émile LITTRÉ, *Études et glanures, pour faire suite à l'Histoire de la langue française*, Didier, 1880. 「言葉の病理」*« Pathologie verbale »* については、本稿注23)を参照されたい。
- 6) ピエール・ラルースが自らの辞典の引用例として同時代のテキストを挿入したのは、彼の言語に対する通時的な視点が関係していることがその序文からわかる。「*Les immortels écrivains du XVIIe siècle ont fixé notre idiome, lui ont donné sa forme nationale ; mais ceux de notre époque l'ont assoupli, étendu, plié aux innombrables besoins de l'esprit et de la pensée [...]. Pourquoi donc, comme presque tous nos devanciers l'ont fait, bannir ces écrivains d'un domaine qu'ils ont si heureusement contribué à cultiver et à fertiliser? Nous leur avons, au contraire, réservé une large place [...]*», *Grand Dictionnaire universel du XIXème siècle*, tome 1, LXVI.
- 7) *Histoire de la langue française, op.cit.*, p.307.
- 8) *Études et glanures, op.cit.*, p.13.
- 9) *Ibid.*, p.46.
- 10) *Histoire de la langue française, op.cit.*, p.307.
- 11) *DLF*, tome 1, XXXVII.
- 12) p.4 下から p.5 上にかけての抜粋を参照されたい。
- 13) *DLF*, tome 1, XXVI.
- 14) 同じく19世紀後半に編纂された歴史言語学の見地に立った辞典であり、ある意味でリトレを乗り越えたとも評価されるダルメストテール、アッツフェルド、トマらの『フランス総合辞典』*Dictionnaire général de la langue française* (Paris, 1890-1900)における地方語の扱い方と比較すると、リトレの姿勢が浮き彫りにされるだろう。『フランス総合辞典』の著者たちは、彼らに数十年先立つ先駆的辞典における「地理的逸脱」を暗に批判しているようである。

« [...] nous n'avions pas à faire entrer dans le Dictionnaire tous les termes employés encore

aujourd'hui dans les divers patois sortis du latin populaire des Gaules, et conservés sur tel ou tel point du territoire. Nous avons admis seulement ceux dont l'usage était resté commun à toute une région de la France. Dans les oeuvres des auteurs contemporains qui, à l'exemple de ceux du XVIIe siècle, accordent une large place aux termes dialectaux, nous n'avons recueilli que les mots qui tendent à pénétrer dans l'usage. Nous ne devons pas oublier que nous composons un dictionnaire de la langue commune » (tome 1, IX).

- 15) *DLF*, tome 1, VI.
- 16) *Ibid.*, VII.
- 17) *Ibid.*, VII.
- 18) *Dictionnaire de l'Académie française*, 6^e éd., 2 vol., Paris, 1835.
- 19) Louis-Nicolas BESCHERELLE, *Dictionnaire national, ou, Dictionnaire universel de la langue française*, 2 vol., Paris, 1843-1845.
- 20) ここで断っておかなければならないが、ベシュレルの百科的な辞典の語彙数はリトレのそれをはるかに上回るものであり、同じ冒頭部分を比較しても、それは固有名詞を含めてこの一覧表に載っていない語を数多く記載している。
- 21) *DLF*, tome 1.
- 22) Georges MATORÉ, *Histoire des dictionnaires français Larousse*, p.252.
- 23) ジョルジュ・マトレが言語に関して「病理」という語を使った時、それがリトレによって「言葉の病理」という小論の中で用いられた場合と意味が異なることに注意しなければならない。リトレはこの小論において単語が時代と共に大きくその意味や綴字、発音等を変えた例を扱っているのであり、そこで対象とされる「異常な変化」とは通時的な性質のものである。一方でジョルジュ・マトレにおいては標準的用法に対しての、個人的で特殊な語の用法を指して「病理」と呼び、それは共時的体系の内部における問題なのである。
- 24) *DLF*, tome 1, XVII.
- 25) 一例を挙げよう。名詞 « abîme » の項目の中で, « l'enfer » の意味に続けて「詩的誇張表現」としてマリ・ジョゼフ・シェニエの『出陣の歌』の詩句が引かれている。

« Sa sombre tyrannie entassait les victimes, Et des prisons d'État il peuplait les abîmes »,
Ibid.
- 26) *Ibid.*, XVII.
- 27) Maurice LA CHÂTRE, *Dictionnaire universel, panthéon historique, littéraire, et encyclopédie illustrée*, 2 vol., Administration de librairie, 1853-1856.
- 28) *DLF*, tome 1, XVI.
- 29) *Ibid.*, tome 2.
- 30) *Ibid.*, tome 3.
- 31) *Ibid.*, tome 1, XVI-XVII.
- 32) *Ibid.*, XLII.
- 33) *Histoire de la langue française, op.cit.*, p.307. リトレの言う二度目の「反乱」とは、古典主義時代に対してなされた19世紀前半の作家たちによる批判である。
- 34) *DLF, op.cit.*, tome 1, L.
- 35) *Ibid.*, tome 1, IX.
- 36) *Histoire de la langue française, op.cit.*, p.27.
- 37) *Études et glanures, op.cit.*, p.13.
- 38) *Ibid.*, p.16.
- 39) *DLF*, tome 1, XXVI. p.5の抜粋も参照されたい。

リトレの辞典について、再考察されるべき3つの問題

- 40) *Ibid.*, XII.
- 41) *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, 1953-1964; *supplément*, 1970, Société du nouveau Littré, tome 1, III.
- 42) « Au lecteur » dans le *Trésor de la langue française*, C.N.R.S., 1971-1994.
- 43) Henri MESCHONNIC, *Des mots et des mondes; dictionnaires, encyclopédies, grammaires, nomenclatures*, Hatier, 1991, p.174.
- 44) Alain REY, *Littré l'humaniste et les mots*, Gallimard, 1970, p.329.